

動物行動学と聞いて、それが何かすぐにピンとくる人は多くないかもしれない。しかし語感から考えて、もしかしたらこんな学問かな、と推測できる人は多いだろう。恐らくその推測は当たっている。私はある授業のレポートのために読んだ『わたしの先生』という著書の中で、この学問領域を知った。その中で、動物行動学は軽くしか触れられていなかったが、その内容と動物行動学の名称から、おおよそどんな学問かは予想がついた。しかし、今回『<動物行動学入門>ソロモンの指環』を読み、ある一点だけ大きく読みが外れていたことがあった。それは、動物たちが思っていた以上に神秘的であるということである。以下には『<動物行動学入門>ソロモンの指環』のほんの一部を紹介する。

ある宝石魚類の魚がローレンツの研究室に飼われていた。この魚の育児は、見ていてもはるかに感動的で、『<動物行動学入門>ソロモンの指環』によると、

巣の中に卵あるいはまだごく小さい子魚がはいっている間、彼らは巣に誠実に「奉仕」する。トゲウオがやるように、水をあおってたえず新鮮な水を巣に送りこむ。一定の時間ごとに、夫婦は軍隊のような正確さで交替する。やがて子魚たちが泳げるようになると、親は注意深く彼らを引き連れて泳ぎ、子魚の群れはいとも従順に親のあとからついてゆく。すべて一度みたら忘れられぬ、絵のような光景である。

さらに

子魚たちは生後数週に達するまで、毎晩日暮れどきになると、幼い時代をすごした巣穴へ連れもどされる。母親は巣の上にかんばっていて、きちんとしぐさのきまった動きをして子魚たちをひきよせる。(中略) そのひまに父親は、水槽じゅうをせわしく泳ぎまわり、おくれた子はいないかとさがす。もしいたら、もう呼びよせるようなまだるっこいとはせず、さっさとそいつを口の中へ吸いこんで、巣まで運び、巣穴の中へ吐きだしてやる。

と記されている。これは実に人間らしく見える行動ではないだろうか。公園で遊びまわっている子どもの集団にある一人の親が「帰るぞ」と声をかけると、親の声を聞いた我が子は自ら親の元へやってくるだ

ろう。しかし、まだ遊び足りないとか、単に周りの声に集中しておらず、声をかけられても親の元へやっこない場合も恐らくあるわけで、そういう時には腕を引っ張って強制的に連れて帰ることになる。やり方は違えど、宝石魚はこれと似たような行動をしているのである。

しかし、ここまでは単に、宝石魚は遺伝子にインプットされた通りに動いているに過ぎないだろう。つまり、新しい事態に何も対応できないと考えられるかもしれない。ところが、この宝石魚の話にはまだ続きがある。私が真に興味深く感じ、感動したのはその部分である。以下は午後遅くに研究室に入ったローレンツが、子魚を寝かしつけている途中の宝石魚に餌のミミズを与えた時の話で、父親が仕事(迷い子探し)をお留守にして、ミミズにかみついた後のことである。

ところがそのとき、一匹の迷い子が水槽の中をひとりぼっちで泳いでいるのが目にとまったのである。電気でもかけられたように彼はとびあがって、すぐその子に追いつき、もうミミズでいっぱいになっている口の中へさらに子魚を吸いこんだ。さておもしろいことになったものだ！ 魚はまるでちがう二つのものを口の中に入れていた。一つは胃袋へ、もう一つは巣穴へ運ぶべきものなのだ。どうなるだろう？ (中略)

ところが現実起こったのは、はるかにすばらしいことであった！ 魚は口をほおぼらせ、硬直したようにじっとしていた。かむこともせず……。私は魚が思案するのをみた！ 考えてもみたまえ。魚が真に心の葛藤におちいるとは。そして、まるで人間と同じように、あらゆる道を断たれ、立ちすくんだまま、進むことも退くこともできないことになりうるとはなんとおどろくべきことではないだろうか。

これはフィクションではない。ローレンツや彼の弟子が見たノンフィクションドラマなのである。もしこの事態の解決策が遺伝子にインプットされているのであれば、この魚は一時停止するまでもなく、すぐに何らかのアクションを起こすであろう。しかしそうではなかった。どうすべきか、確かにこの魚は葛藤していたのである。子魚を口に放り込んで巣穴へ運ぶことも、食事をとることも本能であろう。

つまり本能と本能がぶつかり合っただけの葛藤なのである。

あなたは、魚が葛藤を起こすなんて、知っていただろうか。少なくとも私は考えたことすらなかった。なにしろ、魚である。犬や猫が葛藤を起こすというのならなんとなくわかる。しかし、魚である。食事時に魚を食べたことがあるだろう。そこで私は彼らの脳を見たことがない。恐らく脳みそ自体はあるのだろうけど、小さすぎるせいか、見たことがない。だからこそ、彼らが思考するなんて考えたことがなかったのである。ただ遺伝子にインプットされたプログラムのままに生きていたのだ、これは今考えれば非常に恥ずかしいことである。

さて、さっきの宝石魚はいったいあの後どうしたのだろうか。結局飲み込んでしまったのであろうか。

何秒もの間、宝石魚の父親は壁につきあたったようにつつ立っていた。だが彼の中でどんなことがおこっているか、ありありとみえるようであった。ついに彼は、この心の葛藤を彼なりの方法で解決した。それはまったく尊敬の念を禁じえないものであった。彼は口の中のものをぜんぶ吐きだした。

なんと彼は口の中のものを全て吐きだしたのである。そして水底に沈んだミミズを食べたあと、子魚を口に放り込んで巣穴に送り届けたのである。もしかするとあなたは、なんだそんなことかと思われているかもしれない。しかし何度も繰り返すように、このノンフィクションドラマの主人公は魚なのであり、解決したのも魚本人なのである。さらに、子魚ごと飲み込むことや、ミミズを口に含んだまま巣穴に向かうということをせずに、その場で吐きだして解決するという、実に頭のいい行動をとったのである。この部分を読んだのは登校途中のバスの中だったが、私はあたかもその現場を実際見たかのように、心の中で賞賛の声を上げ、気づくと表情がほころんでしまっていた。だからもしかしたら周りから変な目で見られていたかもしれない。しかしそんなことは関係ない。なにしろ、思わずほころんでしまうほどの感動はとて久しぶりに味わったのである。変に思っても、見て見ぬふりをしていただきたい。

動物行動学とはその名の通り、動物の行動を研究する学問である。しかし、これが何の役に立つのかと考えてしまうのは必然的なことかもしれない。私は、研究とは研究者の知的好奇心を満たすために行われるべきだと考えている。今回、『<動物行動学入門>ソロモンの指環』を読んでますます、その考え方に確信を持った。なぜなら、この著書の文章からは著者であるローレンツの動物への愛が、ひしひしと感じられたからである。彼は、何かの役に立とうなんて思って、動物たちの行動を研究しているというわけではなさそうだった。ただ動物の魅力に強く引き付けられているからこそ、研究を行っているのである。ところが、それらの研究によって動物の生態がわかり、いくつかの利益を世の中にもたらしたことは事実である。そうでなければ彼がノーベル賞を受賞することなど考えられないのだから。

私は動物を愛してやまないローレンツの『<動物行動学入門>ソロモンの指環』に出会ったことを、非常に光栄に思っている。この著書は私を私の知らない世界へ招待してくれたのである。もし、高校時代以前にこの著書に出会っていたのなら、私は先ほどの宝石魚のように葛藤していたかもしれない。教育学の道に進みたいが、動物行動学の道にも進みたい。宝石魚は実に感心する解決策を実行していたが、私の場合は、一度岐路に立たされてしまったら、どちらの道も上手に進めないような気がしてならない。仮に一方の道に足を踏み入れたとしても、もう一方の道を諦めきれずに、悶々と学生生活を過ごしていたかもしれない。そう考えると、この時期に『<動物行動学入門>ソロモンの指環』に出会った運命に感謝すべきなのかもしれない。

『<動物行動学入門>ソロモンの指環』コンラート・ローレンツ著、日高敏隆訳、早川書房、1987

(かまくらのりと・札幌校3年)